

年間第7主日

2017. 2. 19

ソウル教区司祭 ^{オ デイル} 呉 大一神父

マタイ 5・38-48

今日の福音は、年間第4主日から始まったマタイの福音書5章の最後の部分であります。神様の愛の模範に従って、狭い偏った心や私情に捕らわれず、隣人の境界を越えて、敵さえも愛さなければならないと強調しています。しかし、隣人を愛するということがさえ骨が折れるほど大変なのに、どうやって敵まで愛することができるか、大変困り果てるどころです。さらに、敵を愛するからこそ、神の子になることができるというみ言葉の通りであるならば、神様の子になれる人が果たして何人いるか疑問です。

そのようなことは聖人たちのみ適用されるのであって、わたしたちからは遠い話のように聞こえます。しかし、わたしたちは、すでに聖なる、完全な道に入っています。今日の第2朗読の「神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです」という言葉は、神様がわたしたちを聖なる完全なものに造られたという意味です。したがって、たとえ、わたしの資格は微々たるものでも、聖霊がわたしにとどまっておられ、ただ愛でわたしを満たしてください、聖別してくださったことを堅く信じ、積極的に愛を実践しなければなりません。

一方、古代社会では、被害者に与えた傷害や損害を加害者に同じように報復する罰がありました。これは同態復讐法という法律です。「人を打ち殺した者はだれであっても、必ず死刑に処せられる。家畜を打ち殺す者は、その償いをする。命には命をもって償う。人に傷害を加えた者は、それと同一の傷害を受けねばならない。骨折には骨折を、目には目を、歯には歯をもって人に与えたと同じ傷害を受けねばならない。家畜を打ち殺す者は、それを償うことができるが、人を打ち殺す者は死刑に処せられる」(レビ24・17-21)。また、イスラエル人は血に生命力が宿っていて(創世記9・5)、無念に死んだ人の血が、その訴えが、神様にまで上ると考えました(創世記4・10)。従って、殺害された者の近親者は、その怨霊をうかばせるために、殺人者に対して血の復讐を行いました(士師8・18-21、サムエル上14・7-11)。

ところが、このような血を流すことの悪循環が後を絶たず継続されたため、「目には目、歯には歯」という同態復讐法を制定して、それ以上の無分別な血の復讐を防ごうとしたのです。旧約聖書に記録された同態復讐の法律は、古代オリエントのハンムラビ法典の影響を受けたようで、むしろ旧約聖書で厳格な

正義の実現の意図がより強力に浮上されます。しかし、これらの同態復讐の法律の原則は、その二人がどんな形であれ、同じ体の組織を持っていないので、決して公正であることができないことから矛盾と葛藤を生じさせるようになって、徐々に金銭的補償制度にとってかわられ、最終的には、イエス様によって完全に廃棄されることになったのです。

ところが、いざイエス様の愛を実践しなければならないわたしたちは、そのお返しの際、自分が受けた分だけ返すことに満足できず、自分が受けた以上に復讐をすることで気が晴れるようになるのです。このようなわたしたちには、今日の福音は、あまりにもわたしたちから遠い話のようにしか聞こえません。隣人を愛するだけで困難なのに、敵まで愛しなさいと求めるイエス様が、むしろ憎らしいとさえ思われます。しかし、だからといって愛を諦めるわけにはいきません。「愛は決して滅びない。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」(1 コリント 13・8, 13)

愛は神様の本性自体であり、キリスト者のアイデンティティを明らかにするしるしです。「すべての律法の中で最も大きな掟は何ですか？」と尋ねる律法学者に、イエス様は、「神を愛し、隣人を自分のように愛さなければならない」と答えました。わたしたちが教会に熱心に来て、熱心に祈るのも、神様をもっと愛し、隣人をもっと愛するためです。しかし、わたしたちは最初からいきなり隣人を愛し、敵を愛することはできません。愛は、まず自分自身から始めて、家族や隣人に、より成長していきます。従って、わたしたちは、自分の中で愛が成長できるように努力しなければなりません。

先週の主日の福音で、イエス様は、「だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい。あなたを訴える人と一緒に道を行く場合、途中で早く和解しなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官に引き渡し、裁判官はしもべに引き渡し、あなたは牢に投げ込まれるにちがいない」(マタイ 5・23-26)と言われました。このみ言葉のように、わたしたちは、到底許すことのできない最後の一人を許すまで天の国に入ることができないということです。

愛、そのものである主よ、わたしたちに愛の心を植えてくださり、周りの隣人への愛を実践し、最終的に敵までも許すことができるお恵み与えてください。

最後に、わたしは3年間の日本の生活を終えて、3月20日に韓国に戻ることになりました。今までわたしを暖かく見守ってくださった吉池神父様と高円

寺教会のすべての信徒の方々に感謝を申し上げます。良い思い出をたくさん
持って行きます。韓国に帰っても高円寺教会の共同体のためにお祈りします。
ありがとうございました。